

## 就業時間帯の多様化と家庭生活への影響——夕方・夜間の就業や週末勤務がある夫婦は家事・育児をどうやりくりしているのか

Craig, Lyn and Abigail Powell (2011) "Non-standard Work Schedules, Work-family Balance and the Gendered Division of Childcare" *Work, employment and society* 25 (2), pp. 274-291.

東京大学大学院 高見 具広

### 就業時間帯という研究領域

働き方・労働時間が家庭生活に及ぼす影響は現在でも重要なテーマである。ここで、「労働時間がどのような問題を引き起こすか」とともに大事な点は、「どのような働き方・労働時間だと問題なのか」である。労働時間の問題というと、どうしても長時間労働がクローズアップされがちだ。もっとも、過度の長時間労働が健康やワーク・ライフ・バランスなどに悪影響を及ぼすことは、多くの研究が指摘してきた通りである。ただ、長時間労働という切り口ばかり注視していると見過ごしてしまう労働時間問題もある。「長さ」とは別の側面でも労働時間は問題になりうるからだ。

そのひとつの切り口が就業時間帯である。就業時間帯については、従来は平日の日中という時間帯に就業する割合が圧倒的に大きかったが、近年はそうした「標準的」な曜日・時間帯での就業割合が減少し、かわりに夕方・夜間の就業や週末勤務といった「非標準的な就業スケジュール (Non-standard work schedule)」の働き方が拡大している。就業時間帯は多様化しつつあるといえる。多様化の背景には、経済のサービス化、グローバル化などが指摘され、近年では男性のみならず女性も多様な時間帯に働くようになっていられる。そして、非標準的な就業スケジュールが何をもたらすかの研究が、海外では近年多く行われてきた。既存研究では、夕方・夜間の就業や週末勤務の影響について、働く者の健康への影響はもちろん、家庭生活への悪影響が多く指摘される。具体的には、夫婦関係の質や安定（会話の減少や離婚）、親子関係、子どもの発育への悪影響等が研究されてきた (Staines and Pleck 1983, Presser 2003, White and Keith 1990 等)。

### 本論文の内容

そうした研究の系譜に数えられるのが本論文であ

る。本論文では、幼い子どもをもつ家庭において、夫婦それぞれの就業時間帯が、家事・育児など家庭内での時間のやりくりにどのような影響を及ぼすかが分析される。

本論文のユニークな点は2点ある。1点目は、幼い子どもを抱える夫婦が仕事と家庭の双方からくる要求にどう対処しているかを、各時間の長さをもって明らかにしたことだ。検討される時間は、家事時間、育児時間、子どもと一緒にいる時間である。2点目は、本人と配偶者のデータを照らし合わせて、男性・女性の就業スケジュールがその配偶者の時間配分にどう影響するかが分析される点である。そして、分析の結果、就業スケジュールが家庭生活の時間配分に及ぼす影響はジェンダー非対称という知見が得られた。

データは、オーストラリア統計局の生活時間調査 (2006年) が用いられている。非標準的な就業スケジュールの変数は、平日 (月曜～金曜) の午後7時～午前7時の間に就業がある場合を「夕方・夜間の就業」、土曜・日曜に働く場合を「週末勤務」とし、平日における夕方・夜間の就業、週末勤務それぞれの影響を検証している。被説明変数は、「労働時間」「家事時間」「育児時間」「子どもと一緒にいる時間」である。なお、育児時間は、「子どもの身体的・日常的な世話の時間 (食事・風呂・寝かしつけなど)」「会話を通じた交流の時間 (教える・本を読む・遊ぶなど)」に分けて分析される。同じ育児といっても、父親は、子どもと一緒に遊ぶことはしても、身体的ケアは母親任せという知見があるからだ。

分析結果を要約しよう。まず、就業スケジュールが自身の家事・育児時間に与える影響が分析される。それによると、男性・女性に関わりなく、夕方・夜間の就業、週末勤務がある場合は労働時間自体も長く、自身の家事時間、育児時間、子どもと過ごす時間は短い。

では、就業スケジュールが配偶者の家事・育児時間

に与える影響はどうか。結果は大変興味深い。まず、女性が非標準的な就業スケジュールで働く場合は、その配偶者（男性）の家事、育児、子どもと過ごす時間に大きな違いはない。これと対照的に、男性が非標準的な就業スケジュールで働く場合は、標準的な場合と比べて、配偶者（女性）の家事・育児時間が長い。具体的には、男性に夕方・夜間の就業がある場合に、その妻は家事時間や子どもの日常的な世話の時間が増え、休日勤務がある場合も妻の育児時間が増える。ここから、非標準的な就業スケジュールが家事・育児における性別役割分業を強化すると、著者は結論づける。それは、男性が非標準的な就業スケジュールで働く場合に、妻の家事時間、子どもの日常的世話の時間がきわめて長くなることに顕著に表れている。

#### 本論文の意義

分析結果から示唆されるのは、家事・育児に関する性別役割規範が強固であるため、就業時間帯が多様化したことのマイナスの影響を主に女性が被っているという現実である。

家庭生活・社会生活には一定のリズムがあり、時間帯は日々の生活を送る上で重要なベースになっている。仕事のリズムが生活のリズムにマッチしない場合、家庭生活に負担がかかるのは当然といえる。特に幼い子どもをもつ家庭では、大人の仕事のリズムだけでは日々の生活が立ち行かない。生活と仕事、2つのリズムの衝突は最も激しい形で生じよう。夕方・夜間の就業、週末勤務といった非標準的な就業スケジュールは、そうした問題を引き起こしやすい働き方といえる。では家庭はどうやりくりし、リズムの衝突問題を回避しようとしているのか。端的に述べるならば、そ

れが「女性の頑張り」に頼っていることを分析結果は示す。つまり、働き方・労働時間がもたらす家庭生活へのひずみ、子どもへの影響を、女性（母親）が必死に食い止めようとしている姿が垣間見える。ただ、問題は、分担しない男性を責めることであろうか。各家庭という次元では、男性が家事・育児を積極的に行えばよりうまく対処できるだろう。ただ、マクロ的に考えると、就業時間帯の多様化が引き起こす問題は、家庭内での分担のあり方、男女間の勢力争いに還元するだけでは足りない。家庭生活のリズムに負担をかける働き方それ自体がまず問題にされるべきだろう。経済のサービス化、グローバル化などは不可避免的な傾向ともいえるが、経済的な便利さを追求する中で、夕方・夜間の就業、週末勤務など、生活リズムと衝突しうる働き方が増えていることを、問題として声をあげていくことも大事なのではないか。豊かな社会はどうあるべきか、今後、社会のあり方の選択を迫られる可能性がある。

#### 参考文献

- Presser, Harriet B. (2003) *Working in a 24/7 Economy: Challenges for American Families*, Russell Sage Foundation.
- Staines, Graham L. and Joseph H. Pleck (1983) *The Impact of Work Schedules on the Family*, The Institute for Social Research, The University of Michigan.
- White, Lynn and Bruce Keith (1990) "The effect of shift work on the quality and stability of marital relations," *Journal of Marriage and Family* 52 : 453-462.

たかみ・ともひろ 東京大学大学院博士課程。最近の主な著作に「出産・育児期の就業継続における就業時間帯の問題——復職後の同一就業継続に焦点を当てて」『社会科学研究』第64巻1号（東京大学社会科学研究所、2012年）。労働社会学専攻。